本會本學年度の――豫定

1. 本學年度の研究豫定
第一學期、歷史、地理に關して
第二學期、音樂、美術に關して
第三學期、教育及教授法に關して

2. 各學科目參考書の研究
役員に於て分擔研究し、各科參考書を体系付けて該科目の時間的空間的趨勢の推知に資し度いのです。で先づ一科目を更に細分して手を付けますので、幾年ものに更に經驗事業のつもりです。そしてそれを毎會誌に發表することにしました。今學期は地理（地文、日本地理、外國地理、地圖）です。

3. 臨時會の設け
會員の研究發表としての會合は從前の通り毎學期一回でありますが、更に臨時會を設けまして、必要に應じて何回にても隨時開會し以て、知名の士の高見卓説を伺ふつもりであります。

おしらせ

一、九月中旬、臨時會
理學士 **田邊尚雄氏** を聘し蓄音機入りにて **音樂の歷史**（日本及西洋）及 **味ひ方** に就きて。御研究を御伺ひ致します

一、十月初旬、第三十九回例會
西洋及日本音樂に關する會員の統一的研究發表。

一、十月中旬、第四十回例會
東西美術の歷史及味ひ方に關する會員の研究發表。

一、文展開催中、臨時會
會員諸氏の爲特に **澤村先生** をわづらはし **繪畫の味ひ方** に就きてお話を御願ひます。
會員賛助員の皆樣御來會下さい

中川謙二郎先生を送る

大正六年六月十一日、中川謙二郎先生、校長の職を辭せられ、我が文科學術談話會、亦茲に先生を送らむとす。

惟ふに、我が文科學術談話會は、實に先生を會長として、多年研究の歩武を進めわきて明治四十四年七月、本會誌の發刊に際して賜はれる先生の熱誠なる激勵と多年の懇篤なる指導とは、本會々員をして感激措く能はざらしめし所にして、本會の今日あるは、實に先生に負ひ奉る所決して尠からざるなり、今や先生職を退き給ふ、我等益々鋭意精勵、學を研き業を勵み、以て先生多年の教示の旨趣に添ひ奉らむ事を期す。

茲に、本誌を編むに際し、感慨極まるところを知らず。

謹みて多年誘掖の鴻恩を謝し、併せて先生の健在を祈る。

大正六年六月二十五日

文科學術談話會

中川先生の御略歴

嘉永三年九月二十一日京都府南桑田郡馬路村に御誕生明治九年七月十九日新潟縣新町學校百工化學科教員の職に就かせらる。

仝十四年八月九日東京女子師範學校教諭にならせらる

仝二十四年女子高等師範學校長心得を命せらる

仝三十四年文部省視學官兼東京高等工業學校教授の職に就かせらる

仝三十九年仙臺高等工業學校長に轉せらる

仝四十三年東京女子高等師範學校長にならせられ

大正六年六月十一日御退官

明治四十四年六月二十八日勳三等瑞寶章を授けられ

大正六年三月十日正四位に叙せらる

告別式

六月十二日午前十一時

講堂へ入つた時は幼稚園の子供が前の方で立つたり坐つたりして居る樣子が見えた私は知らない人々の間に雜つて後ろの方に立つて居た。

まだ先生はいらつしやらないと云ふ事にどれ程の喜を見出した事であらう此の時間の續いてゐるといふ事が頼りない慰であり望であつた。

「私は諸先生に助けられつゝもなし得た事は誠に少なかつたそれは私の力の足りないからであつた併し私は勉強した私の殘したものは極僅しかないけれど中川は勉強家であつたと認めて呉れるであらう」

やがて壇上に立たれた校長樣のこの御言葉の莊嚴さに私は全身の引き緊るのを覺えた曾てトラファルガーの戰に臨終に臨まれたネルソンの句を私は新らしい人格をもつて再び伺つてゐる樣な氣がした私共の爲に健康を祝して下さつて最後の壇を降りられた時坐ろに「十有三春秋逝者已如水」と叫ばずには居られなかつた。

悲しみといふには餘りに緊張してゐる私は巖頭に立つ思がした。

その人の最後の言葉は過去に亘るその人の人格の凡ての强さをもつて吾人に刻みつけられるものである事をつく〴〵思つた。

凡てがすむだ後雨の中にあじさゐの花を見つけて

師の君を送りまつりし水無月の

思ひ出に咲けあじさゐの花

生徒送別會

今宵午後六時廿五分から中川校長先生の送別會が開かれた、校長先生と生徒丈の集りである。

一、開會之辭、二、謝辭、三、和歌、四、餘興（理一オーゲストラ、家一、廿一世紀の磁石、文一唱歌）茶菓、五、餘興（家二、校庭の木の精、文四、擧りて、文三、今様枕の草子、文二、唱歌、理四、力、理二、關所、家三、育くまれし人々、家四、唱歌（送別の歌）理三、ランス養成所努力）六、閉會之辭、萬歳三唱。

以上

僅三日ばかり前からの準備であつたけれども、先生を慕ひ奉るの至情は今日の會をかなりによい出來榮にした、ほんとにこれ程眞劍な愉快な會はかつて見ない、けれど底力のある悲しさは誰の胸にも流れてゐた、謝辭にも「先生すべてのものは涙を以て感謝致して居ります」とあつた、校長先生は例の重々しいけれどいつもよりはどことなく物寂しい御調子で「……感謝の生活とは最もよいことである、常に感謝にみちてゐる時は仕事をするに力がある、熱がある、私も今夜は實に諸君に對して厚く感謝してゐる、今私は重任に堪へないからこゝを辭するのであるが、今後全く無爲に過さうとは思はぬ、もし何等かなす所があつたならば、その力は諸君から與へられたものと思ふ」との有り難い御言葉を承はつた。

萬事よく進行したが殊に餘興はいづれも〳〵よく出來た、「力」のペスタロッチもよかつた、家四の先生の影繪は校長先生をつくりで見る者をしてそゞろに涙ぐませた、「擧りて」の幼稚園の子供には先生は握手をさへ賜はつた、「子供はどこから借りて來た」との御尋ねもあつたとか、文四の者とは誰にも思はれなかつた

だらう、小足に歩む老舍監も「秀逸」との御褒めに與つて喜んでゐた、「育くまれし人々」の中では鬚髯ゆたかな岡田文相が一番立派に見えた。此等はすべて美しい思出の種となることだらう。

先生の萬歳を三唱し、先生からは又生徒の萬歳を祝して戴いて會を閉ぢたのは九時二十分。文科のものゝ文章と和歌の綴、園藝で作つた花籠はいたく御滿足の御樣子に御受納下された、朱さんが聽講生を代表して贈物をさゝげる姿をみた時私は泣かずには居られなかつた、定めし先生も御喜び下さつた事であらう。

× × × × × × ×

あゝ、先生は今頃どう遊ばして御出でだらうか、そして皆さんは……私はとても興奮して眠れない、漸く「いよ〳〵お別れ申し上げた」といふことを感ずる。（六、十六、夜）

我が中川先生

（一）

「これだ、これだつたのだ。」入學式の日はじめて校長先生の御聲を伺た時、長い間探し求めてゐた物に出逢つた樣に私は叫ばずにはゐられませんでした。それほど先生のお聲は私に强いひゞきを與へてくれたのでした。その後幾度私はあの講堂であのほがらかなお聲を伺つた事でせう。

さうです。ほがらかとより他に現はし樣のないあのお聲が、講堂の隅まで響いてゆく時、私にはそこに一杯つまつてゐる人達の心が寸分の隙もなく引き締められてゆく樣に思はれました。「ひれふせ」といはれたら一も二もなくひれふしてしまへる程のたふとい純な心持がいつもあのお聲の聞える間續きました。

「お小さいお身體の全體にみちあふれた力から生れる聲、否、全人

格の響きなのだ」かう思ひ乍ら、私はいつも眼を閉ぢて、しみ〴〵と聞いて居りました今も眼を閉ぢれば例の口調で「本校長は本校職員及び生徒を代表して……」と仰有るのが、はつきりと心の底から響いてまゐります。

先生と親しくお話した事は只一度きりで御座いました。あの窓際に梧桐の茂つた薄暗い校長室に私は先生と向ひあつて腰を下しました。先生は靜かなものいひで、いろ〳〵の事を御きゝになつたり、お話しになつたりした後で、「身体は丈夫ですか」と低い、しかも力のこもつたお聲でお尋ねになりました。

私は覺えず首を上げました。先生は大きなお手で眼鏡を一寸つまみながら、じつと私をみてゐらつしやるのでした。やゝ微笑心地のお瞳、それこそは實にあの聲の持主ならではと思はれる、黑い大きい輝いた、强い、しかもうるほいのある物靜かなお瞳でした。或人が先生を「お父樣のやうな」といつた事がありました。其時にいゝえ

お父様では勿体ないじやありませんか」と答へた私は、その瞬間本當に、父に對して持つ尊い、純な心を以て、しみ〳〵と先生の御面を仰いだのでした。

この二つはどちらもどうしたつて私共になくてならない物なのでした。たとへ今其尊いお聲と、お瞳に私共はお別れしなくてはならなくても心に刻んだそれらの未來永劫消えない以上、私共はその聲にいましめられ、その瞳に、育まれるのです、しつかりとこの二つを抱きしめて、私は、ふかく、つよく、ふみしめ乍ら歩んでゆきたいと思つて居ります。

（二）

一年の何時の事であつたらうか、何かの試驗の日に私が本校から寄宿につゞくあの長い敷石の道を歸つて行くと、後から校長先生がお見えになつた。恐る恐る片側へよつて丁寧に御辭儀をすると、先生は、「何の試驗でした、試驗は苦しいですか」、とお尋ねになつた、

私は無調法のない樣にお答へ申し上げると、先生は又、「私も試驗は大嫌だ、試驗廢止のストライキでも起しては何うだ、大に賛成するが」と仰有つて御笑ひになつた、それから私は校長先生は何でも御話申上げられる御方だと思つた。

（三）

二年の三學期は私にとつて最も思出のおほい時であつた紀元節の祝賀會がすむと間もなく病床に就いていて以來四ヶ月常に病魔と戰はねばならなかつた。病室に移つて間もない日であつた、カツとさす陽の光はまるで春の樣に暖い眞晝頃、廊下傳ひの靴のひゞき校醫の先生かと思ひの外校長先生の御姿、吁、長い間には隨分多くの人々の見舞を受けたが、この時の校長先生の御姿と御言葉位、あざやかに記憶申し上げてゐるものはない。

（四）

飯田さんと飯島さんと私と三人で、鞦韆に乘つて遊んで居りまし

た所へ、先生は御出でになりました。まだ女學校の二年の時でございました。

「校長先生が御出でになつた。」と言つて私達はいそいで下りて御辭儀を致しました。「どれ」、と仰せられ乍ら、先生は思ひがけなくも鞦韆の繩を御執りになりまして、「一緒にどうです。」と仰せられました。心をわくわくさせ乍ら、そつとその繩を持ちましたが、又そつとはなして、柱に三人してつかまつて、笑ひ乍ら先生の御樣子を拜見致して居りました。二三度ゆるくこがれた後、先生はしづかに御下りになりました、御辭儀をした三人は笑ひ乍ら何にも言はないで、ただ、何時迄も何時迄も鞦韆に乘つて居りました。幼い心は校長先生と親しく御一緒になりました事の嬉しさで一ぱいだつたのでございます。

（五）

五年前、はじめて女學校に入學致しました時、先生は「貴女方は

もう兒童ではない。これからは生徒である」。と仰せられました。本校の生徒になりましたはじめ、又更に先生は「貴女方を學校は一人前の人として見るのである」。と仰せられました。

校長先生を思ひますと、きつと何處からともなくこの御言葉が、私の耳にひゞいて參ります。そして色々な心の力を與へて下さいます。

（六）

六月二日。逗子へ遠足の日でした。

長者ヶ岬から海岸傳ひに歸りますと、途中校長先生は海に石を投げていらしやいました。先生がお投げになる度に、石が海の面をぽん〳〵はねてゆきます。私もしたくなつて力まかせに投げました、けれども、唯沈むばかりでした。すると先生は「教へて上げませうか教へるといつては失禮だが。」と仰しやつて投げて見せて下さいました。私の投げるものは矢張りうまく。ゆきませんでした。先生は

大變お笑ひになりました。波は靜に、はまひるがほがたくさん咲いてをりました。思へばこの時が私にとつて先生と御一緒の郊遊會の最初であり、且最後であつたのでした。私は長く葉山の海岸での先生のこの尊いお言葉を忘れることが出來ません。

（七）

六月二日私達は郊遊會で葉山へ行つた。

その時長者ヶ岬から養神亭までの歸路を、私は氣まぐれにも乘合馬車に乘つた、さまで疲れても居なかつたが、上級の方々が五六人乘つてゐらつしやるのを見てふとその氣になつたのであつた。乘り合といつても、今日は行きずりの人々ではなしそれに、御者が話上手で、立ち並ぶ別莊を指してはその所有者と噂さとをきかせて呉れるので私達は皆興がつた。そして道々徒歩でかへる人達を追ひ越す度に、極りの惡いやうなすまぬ樣な又嬉しい樣な感じがした。

路は眞白だつた陽はまぶしく照つてゐた、私達は又五六人の一群

を追ひ越したしと、いきなり。

萬歲!!!

と高く叫んだ人があつた。驚いてふり向くと、高く兩手をさし上げられて、校長先生はニコ〳〵笑つて御いでになつた。

私は先生を御忍び申上げる度に、アノニコ〳〵した白い御鬚の御顏が一番に浮んで來ると共に、嬉しいやうな、すまぬやうな、その時の心持が胸一つぱいになる。

○

何圖今日別慈親　講學爾來安問津
細雨霏々降綠葉　諸生欽慕淚痕新

○

七閱春秋父母恩　薰陶餘馥滿學園
君不見細雨霏々別師後　庭中千花涕淚繁

かなしくも御辭職なといふ文字を新聞に見る日曜の朝
わきかたう涙こそ湧けわかまへにひろけしまゝの新聞の文字
いまさらに御聲きけは新らしくかなしみ湧くもわりなかりける
教へ子の心の上に神のこと陽のことくにもすみましゝ君
たよるべきかげうしなひて何となく心寂しき昨日今日かな
年頃の君がみさとし今更に涙するまで浮び來るかな
ふとしてはなどゝ思ひて今日もまた校長室の前にゆきけり
なみゐたる人の心は五月雨の空に似るかと思はるゝ今日
をとゝしの入學式にのたまひし君の御聲の尊かりけり
うなゐらも走りより來て君の手に取りすがるなり學びやの庭
思ひ出は葉山の濱の汀にて物のたまひし先生の御姿

大正六年七月六日印刷
大正六年七月九日發行
（非賣品）
東京市女子高等師範學校內
發行所　文科學術談話會
東京市赤坂區新坂町六十八番地八號
編輯兼發行者　千葉安良
東京市神田區旅籠町二丁目十二番地
印刷者　畑桂之助
印刷所　前同所　廣業館
（電話下谷五五七番）